

矢田津世子の世界

渡 邊 澄 子

On works of Yada Tuseko

Watanabe Sumiko

昭和初期、それは戦中期と換言できるが、この時期の注目される作家に矢田津世子がいる。だが、矢田津世子はこれまで坂口安吾研究においてのみ詳細、饒舌に語られてきているにすぎない。世界の人々を震撼させた9・11事件以後、覇権主義的ブッシュ米政権による軍事面強化政策に、米国と同盟国である日本の政権は連動して軍事面強化をはかろうとしていて、戦争体験の“思想化”が緊急課題となっている。一方で、男女平等参画社会実現が今日的課題の重要項目に挙げられるようになっていて、女性の社会的・経済的自立は当然と認識されてきてもいる。矢田津世子はこの現代的課題面からも読み直しを迫られる作家である。

矢田津世子は、一九四四年三月一日に三六歳で生涯を閉じた（戦後まで生きのびさせたかった）薄命の作家であるが、その独創的文学世界の魅力は今なお少しも色褪せていない。生前刊行の単行本は十点である。

『若草物語』（オルコット *LITTLE WOMEN* の翻案、昭和九年九月、少女畫報社）

『神楽坂』（父）『蔓草』『神楽坂』『弟』『旅役者の妻より』『秋扇』『桐村家の母』『女心拾遺』『やどかり』入収、昭和十一年十二月、改造社。

『秋扇』が映画化）

『假面 外二篇』（花火）『妻の話』『假面』入収、昭和十二年九月、版畫莊）

『花蔭』（祖母のために）『秋の鏡』『花蔭』『貧しき席』『姉妹』『愛ゆゑに』『距離』『野道』『空蟬』『秋窗記』後記 入収、昭和十四年三月、

実業之日本社）

『家庭教師』（『新女苑』連載の長編と追記、昭和十五年一月、実業之日本社。映画化）

『巢燕』（『北海タイムス』連載の長編、昭和十五年六月、白水社）

『女心拾遺』（『秋拾』『凍雲』『祖父』『歲月』『魚歌』『松本の縁者』『痴女抄録』入収、昭和十六年一月、筑摩書房）

『茶粥の記』（『茶粥の記』『父』『ひかげかげら』『弟』『花火』『桐村家の母』『遠国の蜩』『池畔にて』『女心拾遺』『兄妹の記』入収、昭和十六

年八月、実業之日本社）

『駒鳥日記』（長編少女小説、昭和十六年十二月、富士書店）

『鴻ノ巣女房』（『鴻ノ巣女房』『橋』『結婚式』『祖父』『萬年青』『寓話』入収、昭和十七年七月、豊国社）

没後に『矢田津世子全集』全一卷（一九八九年五月、小澤書店）が刊行され、短編集六冊の入収作と随想およびノートが収められたが、長編や少女小説はじめ、上記短編集未収録の多数の短篇ほか夥しい量の随想が抜け落ちていて、『全集』からは程遠い。結論的に言えば、矢田津世子研究はまだ未踏の域にあるということになる。とはいえ、矢田津世子に言及した論は決して少なくない。それらは坂口安吾の初恋の女性、永遠の恋人とされたためになされている坂口安吾研究に囲い込まれてのものばかりである。安吾との関わりもミステリアスな要素があつて、実相は闇の中である。にもかかわらず矢田の文学を無視した矢田津世子物語が作られたのは、その頃、真杉静枝・大田洋子とともに〈文壇の三美人〉と謳われたことで、女性が男性の下位におかれ、かつ、彼らの欲望の対象として物視された制度の犠牲に供されてのことであろう。津世子と安吾の間に交流のあったのは独創の矢田文学開花以前である。にもかかわらず、樹立された矢田文学には目をやらず、その頃の津世子についてのみ安吾の側―男性の視点―から数多く書かれてきていて公平を欠く。

矢田津世子の表現活動は一九二九年、次兄不二郎の勤務地に母と共に従った名古屋で『女人芸術』の名古屋支部員となったことに始まり、以後、『女人芸術』と『文学時代』を主舞台として展開された。不二郎は東京帝大法科を出た人だが文学への関心が深く、津世子の一九世紀ロシア文学その他文学的教養は、彼女をこよなく愛したこの兄の示唆による所が大きい。「罌を跳び越える女」が『文学時代』（30・12）に懸賞当選小説として掲載されたのを転機として津世子は文学に生きる覚悟を固めて単身で東京に出、間もなく『時事新報』の学芸部長和田日出吉と知り合う。兄の交友加藤英倫を通して知った大岡昇平や、また、軽部清子や大谷藤子たち、大谷を高く評価していた武田麟太郎などと交流を持つようになるが、津世子は東北秋田の在に生まれたことからことばの訛りへの気後れもあつてか寡黙で派手な行動に出る人ではなかった。安吾との出会いはその頃（32・8）である。安吾は津世子にのめりこんだ。だが、津世子が和田と特殊の関係にあるような噂を耳にして離れ、愛もない有夫の女性と荒み爛れた放浪の生活を過ごした後、約三年後に交際を再燃させるが半年後に絶縁する。この間のことは、津世子への思いを断ち切

ろうとして書いた長編『吹雪物語』(初版³⁸)、一途な恋慕の切なさを盛り込んだ「紫大納言」(40)に忍ばせているが、津世子の名を明示した私小説仕立ての津世子没後の作「いづこへ」(46)「二十七歳」(47)「三十歳」(48)「死と影」(同)などによって津世子物語が出来上がってしまったかの感がある。(「死人に口なし」でここに書かれていることが安吾の妄想であつても作り話であつても津世子には抗弁のしようがない。

一方、津世子が作中に安吾を忍ばせたのは「魚歌」(40・3「文藝」)だけである(「遠国の蜆」を挙げる説があるが違ふと思う)。「ノート」に見られる「坂口安吾は、私の理想とする真の芸術家である」(33・11・15)が示すように、津世子は安吾を作家として高く評価し尊敬していた。『坂口安吾全集』第十六巻に収められている四十四通の津世子宛て安吾の書簡は作家として共に成長したい、しようと励まし合っている誠実なものである。手紙と小説との懸隔は大きい。小説が描く当時の安吾や仲間の河上徹太郎や中原中也たちは、「汚らしい欲情に憑かれ」て、「金を握れば遊里へとび、わざ／＼遠い田舎町まで宿場女郎を買いに行ったり」(「三十歳」)の「酒と肉欲」(「死と影」)に溺れた日常を恬として恥じずに過ごしていたのだ。高貴な少年のような美貌と表現された天性の気品、清潔な魅力をたたえた津世子に、これまで女性を「肉欲」「女体」感官で対してきた安吾は一種の金縛りに陥ったのではないだろうか。安吾もその一人である当時の男性たちの女性劣視・玩具視は内在化されていた。津世子没後の作品に、津世子の「女体」を「猟犬の鋭い」「感官の全部」で嗅ぎ、「暴力」に訴えようとして出来ず、彼女に関する限り「現実を殺して夢に生きよう」と決意して別れたものの、「たかが一人の女」と別れたことで「死の翳を身につけてしまった」なんて「苦笑」もので「バカらし」く思った(「死の影」)ということや、安吾と訣別後に飛躍的な成長を見せ、独自の世界を築き上げた矢田文学にはいささかの言及もなく、「酒と肉欲」視点からの描出で終始していることからそれは言えるだろう。

ともあれ、和田日出吉との交際が如上の男性たちの感官で面白くなされた喧伝が、作家として成長を目指して精進を重ねていた津世子に与えた打撃は大きかった。大岡昇平は「矢田はまあきれいな女だが、当時いわば札付きの女流作家だった。」といい、「トイフェル(悪魔)」と呼んで、文壇に出るための遊泳術に長けていたかのような悪意に満ちた憶測を断定化して発言(創元社版『坂口安吾選集』7月報)している。また、創刊された『日曆』に津世子が参加を望んだ時、噂を真に受けた同人たちが忌避したのを、大谷藤子の熱心な抗弁で参加が認められたということがある。この辺のことを高見順が『昭和文学盛衰史』に書いている。「いやな噂からすでに何年かたっていたが、噂は依然としてつきまといっていた。弱い者いじめの感じでその噂は、女の方だけに集中されていて、下劣な男の糾弾は放置されていた。噂に傷つけられたのは矢田津世子だけで、ために作家としての生命も失われた形だった。」と。さらに高見は、田宮虎彦が大谷藤子の「須崎屋」に触れた解説文(『現代文学代表作全集』第八巻)中の「坂口安吾氏によって書かれている矢田氏の像とは遙かに違っていたように私は思う。(略)『神楽坂』を書いた矢田氏には、私の今述べている大谷氏に似たいかめしい一面のあったことも事実である」を引いて自分も同印象を持ったこと、その噂によって津世子

は「深い心の傷を負わされた感じ」で、それだけにいつそう『臆病』なほど『濁り』をいとう潔癖が感じられた」と述べ、さらに、津世子にまつわる噂、その噂による印象が「昔のままの形で生きつづけていたし、生きつづけ」、その印象が「生涯つきまよって離れず、死後もなお離れない」というのは、なんと残酷なことだろう。矢田津世子の場合だけではかぎらない、そして女の場合にだけにかぎられているこの残酷な運命というものを考えさせられるのである。」と述べている。

『女人芸術』から踏みだした矢田津世子は間もなく「毘を飛び越える女」が『文学時代』に当選したことで、この両誌を主なる足場として活動を開始し、安吾と出会った時はすでに盛名を馳せた作家となつてはいたが、その頃の彼女の文学は時代を反映したプロレタリア小説的要素にモダニズムの加味されたコントの域から抜け出てはいなかった。

初めての小説「嗤ひを投げ返す」(『女人芸術』30・3)は、『反響』と『青鞥』を舞台に生田花世と安田皐月の間になされた(「生きること」食べることに貞操)論争(14)問題が、意識の有無に拘わらず下に敷かれている。ベルトに巻き込まれてもぎ取られた腕の切り口が化膿して職場を追われた夫と、幼い三人の子どもを抱えて貧のどん底を生きるためにおきねは唯一の資本である身体で稼がざるを得なくなる。近所の子どものたちの「インバーイ」の罵声や、女たちからの汚物扱いにも彼女は歯を食いしばる。「嗤ふがいい。存分嗤ふがいい。お前さん達のその嗤ひに一々応答してゐたら私達あ飢え死んでしまふよ。(略)」と悲愴な嗤ひを投げ返す話だがこれに続く「叛逆」(30・12)は、飲んだくれで家族に暴力を振るう貧しい大工だった夫の死後、三人の子どもを抱えたお松は思いあまつて、長男を突き落としてから次男と長女を両脇に抱えて川に飛び込む。長男は死に、娘は途中の棒杭に頭を打って障害者になったが聖ヨハネ教会の神父に助けられる。以後、お松は神父を神とあがめて教会に献身する。神父は説話の度にお松を引き合いに出して神の愛を説き、信者からの献金を殖やした。メリヤス工場に住み込みで働くようになった次男の、祭壇で芝居をする狐野郎の神父に騙されるなどの忠告に、何を罰当たりが叱りつけたお松だったが、間もなく息子の言葉の真実性を思い知らされる。脳に障害を持つ娘が神父に犯され妊娠させられた上、堕胎剤を飲まされていたのだ。寄付金や献金を誤魔化して悪所に通つたり信者の妻と駆け落ちしたり歴代の神父の実態を見ていながら、ひたすら娘の上に奇跡の起こることを信じて崇めてきたその結果がこのような有様だったのだ。宗教や牧師の欺瞞性に目覚め、教会を去る結末の話だが、時代を反映してストライキの先頭に立つ次男の姿を織り込むことで階級社会の矛盾、無知な貧者への飽くなき搾取の構造を浮上させている。翌年六月発表のコント「村の名物」も、小作人たちが年毎に値上げされながら、年に一度の「虫こ祭」に振る舞われる酒に酔って庄屋の思う壺にはまっていたそこを見抜いた若者の指導でみんなが逆襲にでる話である。

「毘を飛び越える女」も、『日本プロレタリア文学集・23』（87）入収に叶った内容の作品である。ここには麹町高等女学校卒業後、二年ほど勤めた日本興業銀行での体験がいかされている。証券部長に呼び出された槇子は思想的注意人物として臍首を言い渡されるが、老練な部長は次の職場の保証と引き替えに仲間を知ろうと毘をかける。彼女はこの毘を飛び越え、三十人ほど集めた職場の仲間を守りぬく。プロレタリア文学をモダニズムの手法で創ったこの時期の作品は、何を書かねばならぬかと言う教条主義的要素が先行していて、内面から湧出したものとはいえずまだるこいが、なかなか面白く切り捨て去られてよい作品ではない。それが証拠にはこの時期に活躍しながら消えていった者も多かったなかで次第に表舞台から声が掛かるようになっていつている。いわゆる商業誌への発表は『サンデー毎日』の「無作法なる蠅」「生意気な髭の話」（共に³¹）に始まるが、『読売新聞』その他新聞への小品寄稿が求められるようになっていて、『新潮』へと発表舞台は広がりを見せていつている。『新潮』掲載の「神聖な事業」（^{32・3}）は、『女人芸術』の人々のなかに見られるプチブル性をかなり辛辣に批判したものと読みとれる作品で注目されてよい出来映えであるとともに、『女人芸術』研究上、資料的有効性を備えてもいる。

ところで、矢田文学は庶民の、とりわけ貧窮層の人びとを温かく描いているところに特色があるが、津世子の出自が『女人芸術』仲間の松田解子のような貧窮階層だったわけではない。今夏、その生地、秋田の五城目町（五城館内に矢田津世子記念室がある）を訪れ、土地の郷土史研究者の話や案内によって従来の年譜では想像を遮断されていた部分に広がりを得た。矢田家は秋田藩久保田氏の下級武士だった。津世子の父矢田鉄三郎は五城目町の有給助役だったが、能力を見込まれて秋田市川尻村の有給助役だったのを五城目町に引き抜かれたのだという。当時の助役は無給が普通で、いわば形骸化した名誉職だったが、有給助役は町長よりも実権を持ち、住民たちからも尊敬される存在だったので、当然、その娘の津世子は町ではお嬢さんとして遇されていたらしい。一九一五年、津世子七歳時に一家は秋田市に転出。父は一時、秋田魁新報の記者を勤めたらしいが、翌年、一家は以前から父が犬養木堂（毅）の院外団の一人だったので彼を頼って東京に出たとのこと。関東大震災で焼失したために転居してもいるが一九一六年から多分二五年まで住んだのが、出世作「神楽坂」その他の作品の舞台となる飯田町である。

犬養木堂を頼って出てきた東京でどのような仕事をしたのかはつまびらかでない。津世子三歳時に、秋田技芸学校を出た次姉ツヤがその美貌によって校長の推薦で、一代で富豪になった金貸業武藤三治の長男重太郎と結婚している。武藤は秋田市内で庭の池に鶴を飼っていたことでも有名な豪邸に住んでいたがやがて東京に進出したために、津世子の父もその傘下で何らかの役職を担当したらしい。早稲田大学を出た重太郎は、絶対の権限を持つ父の膝下で己を発揮させ得ず、抑圧に苦しみ、大杉栄の渡仏費用にと千円を渡したり、後に、野枝とともに遊びに来た魔子を抱いたこともあるというが、金子洋文に『種蒔く人』刊行の資金にと、サイン入りの有島武郎の絵を上げたりもしたというエピソードが残されている人物である。

夜八時ともなると通りに人影も見られないような五城目町の現在から推すと、当時はかなり貧しい土地ではなかったかと思われ、小作人の貧窮生活を子どもの目で見ることはあっただろうが、体験者であったはずはない。時代の動向をとりこんだ創作だろうが、リアリティがあり、作家的力量を思わせる。その下地形成に不二郎の寄与があったとしても、大谷藤子の存在を抜きにして矢田文学の大成はあり得なかったろう。大谷藤子は女を愛する女だった。フェミニズム理論やジェンダー学が文学研究に重視されるようになった現代の視点に立つならば、大谷はレスビアン・フェミニズムの先駆的实践者だったと言える。

大谷藤子は、当時、まだ代表作を生み出していない時期だったが、封建社会での生活者の実相を女性ならではの視点で描いた手堅い手法の彼女の文学は、早くに川端康成が褒め、武田麟太郎に「師匠のものに触れてゐる気持ち」で大谷の作品を読むと言わせた作家だった。そのような大谷が津世子を愛し、いわばモダン派のコント作家だった矢田をより大きな作家にするために、彼女の激しい作家精神を渾身の力で津世子に注いだのだった。大谷の津世子教育がどのようなものだったかは「ノート」に残された大谷の名を明示した次のような片言からも推測される。

「ひとつの作品をよんだ時、ちんまりとまとまったものは頭のよさを感じさせるし、悪文であつても骨のあるものは、掴んでるものを感じさせる。この二つの場合、私は後者をとる。」

と大谷藤子はいふ。

前者にはトルストイを、後者にはバルザック、あるひはドストエフスキイを感じる。

「まとめ上げることは後でもよい。まづ、ひとりの人物をしつかりと掴んで、これを描写する事。それが、あなたには無い。あなたは、たゞに、こぢんまりと、まとめよう／＼とあせつてゐる」

と大谷藤子はいふ。

「たとへば、Aの卑屈な性格を描写する場合、われ／＼は、これを作中の第三者にいはしてはならぬ。Aの卑屈な性格はA自身の行動にて、言葉にていひ表はすべきものである。」

と大谷藤子はいふ。

彼女はたしかに、バルザックで勉強した。(三三・一〇・二八)

大谷の溢れる愛情による励ましを受けながら必死に自分の文学構築に立ち向かった津世子がまず手がけたのは、郷里で起きた事件を素材とした「主人」(34・6、後「凍雲」と改題)だった。愛し合い子までなした若夫婦が親同士の慾のもつれ合いによって仲を引き裂かれ、隠れて逢瀬を重ねるがそれも叶わなくなつて刃傷事件を引き起こす悲惨な物語である。因習と欲が愛をなぎ倒す社会の不条理がよく描かれている。続けて

書かれたのが「旅役者の妻より」(同・8)である。これは矢田文学の一翼をなす「妾(歴史的用語として使用、以下も同じ)もの」の始まりと言える。宇野千代の名作『おはん』(57)を思わせる書きぶりの作。美しい舞台姿に焦がれ、親を捨てて一緒にになったものの旅芸人の生活は厳しく、病を得て夫は舞台に立てなくなる。勘当同様の家に隠れてする母への無心は長く続かず、夫の大金持ちの伯母のつれあいを当てにして素っ気なく断られ、芝居好きの多額納税者の奥様の好意に縋って世話を受けることになる。この奥様には子がなく、その夫には四人の子を持つ「お妾」がいる。夫不在の奥様を気の毒に思い、その優しさに心から感謝して恩に報いようと骨身惜しまず働いていたかよは、夫がその奥様の「男妾」になっていたことを知って愕然とする。早々にこの家を退去するための借金申込の書簡体一人称小説である。ここには、一人の人物をしつかり掴むことという大谷の言葉を受け入れた実践の努力が見られる。

当時の女性が生きられた世界は狭かった。苛酷な世間の目は女性の自由な行動を許さない。津世子の生活空間において見聞できた豊富な素材は「妾」だった。また、津世子の人間認識に奥深さを与えたユニークな人物は姉ツヤの舅だった。この作の夫の伯母のつれあいに初めてこの人物が登場する。金貸しで一代を築いたこの男は「評判の儉約家」で一本の爪楊枝もむだにせずさくられたら削ってまた使い、「便所へは新聞紙を小さく切って入れ」減り方が早いと家人を叱り、朝晩ゴミ箱を自分で点検し、大根の尻尾や人參の皮、出し殻の昆布など拾い出してきては菜にさせ、人から来た手紙は裏返して再利用し、かんだ鼻紙は乾かしてもう一度、という人物である。以後の作品にも度々登場するが、その時々になかなか所を得た登場のさせ方で効果を上げていて独特の味わいを醸し出している。津世子は「ノート」に、「私の興味は武藤のおやぢさんに集まる。／「悪」を是認してゐる態度、「悪」を背負つて敢然と立つてゐるその態度に私は敬服してゐる。／ひとは、「悪」をかくし、「悪」から遠い自分をみせる。だが、武藤のおやぢさんはひとのかくし度い「悪」を平気で背負つてゐる。(三三・一〇・二七)」と、書きつけている。汚濁や悪徳を嫌悪し、清潔に背筋を伸ばして生きた津世子のこの人物評は感慨を誘う。この二作によって津世子に転機が訪れたといえるかと思う。この頃の「ノート」には次のような言葉が書きつけられている。

泉(もの、それ自体)を有つてゐる作家にドストエフスキーがある。チェホフがある。ところが日本の若い作家達の中には泉を有つてゐるものが無い。彼らの多くは泉を外に求めてゐる。或は、壺いっぱいの水をもつてきて、それを泉だと思ひこんでゐる。プロレタリア文学が盛んになつたのは、かゝる泉を求める輩が、たまたまマルクス主義の真理の中にその泉を発見し、これこそ己れの泉だと思つたのである。だが、彼らは、それを己れの泉にはしてゐない。

ドストエフスキーは、ひたむきに、己れの泉を流した作家である。そして、チェホフは、己れの泉をあゝいふ風に流し、かういふ風に流してみても、そこに人生をみてゐた作家である。日本では、夏目漱石が、この泉を有つてゐた作家ではないだろうか？(三三・一一・二六)

津世子は自分の泉を持つと刻苦していた。この刻苦は文字通り骨身を削ることもあった。その起点は一九三三年七月二十二日、突然の検査による約十日間（二十八日、二十九日の説がある）の拘留体験である。生来、頑健ではなかった津世子の健康はこの時損なわれ死を早めた。彼女の逮捕は僅かな資金カンパの廉によるが、この年の二月二十日、小林多喜二が特高警察に捕らえられ、即日、拷問によって虐殺されたそのような時代にすでに入っていた。ファッショ文学が幅を効かす時節が到来していた。言論界の頂上を恣に闊歩し、女性のオピニオンリーダーと目されていた与謝野晶子がいち早く時代を先取って戦争へと民衆を駆り立てていたとき、津世子はそのような風潮に巻き込まれることなく自己の泉をもつことに格闘している。そして書かれたのが、第三回芥川賞の候補作にあげられた「神楽坂」（36・3『人民文庫』）だった。

「神楽坂」には矢田文学特有の世界が出揃っている。「妾」を囲う男、「妾」になる女、吝嗇な男、庶民の打算、障害者問題を包摂した弱者の生き方など。馬淵の爺さんは、高利と抵当流れて羽後随一の高利貸しに成り上がった渡仙の手代を永年勤めて、その度胸のよさと商売のこつと節約ぶりを学び、その手法で金満家に成り上がった男である。爺さんのモットーは渡仙の口写しで、世間は自分を高利貸しと白眼視するが三井三菱と何処が違うか、背広と前垂れだけの違いじゃないか、「義理、人情で算盤玉ははじかれない」である。糟糠の妻の内儀さんは永年の栄養不足と過労から病臥の身だが、床にいても賃仕事の針を離さず、内職の袋貼りにも精を出す。彼女は夫の「妾」狂いに苦しみ抜いてきたが今では諦めの境地に至っている。だが、時には障子に匍い上る毛虫を針で突き刺す、やり場のない妻の情念が巧みに点描される。内儀さんは爺さんが安上がりに孤児院から「女中」にと連れてきた足の悪い種を頼りにしている。種は内儀さんへの同情と感謝から、給金を辞退した上に賃仕事や袋貼りの稼ぎまで逆に主家の家計に入れるので爺さんはご満悦だ。種も、ゴミ箱から摘み出してきた出し昆布の出殻を煮付ければお菜になると爺さんに叱られた時は辛かったが、障害をもつ劣等感から何事も厭わずに献身的に尽くす。子のない爺さんは跡継ぎに弟の息子を候補にしているが、小間物屋を出させて貰っている「妾」のお初の母は、後釜を狙って内儀さんの「片付く」のを待っている。生涯の望みとしていた上方見物も叶えてやらず、三十何年間に質流れの安物の拾一枚買ってやっただけの妻に死なれた爺さんは、贅沢三昧をさせてきたお初が急に忌々しくなり、黙々と家事から客の応対、算盤の手伝いまでする上に、糸くず一本無駄にせず賃仕事に励む種を養女にすることを思い付く、という話である。

続けて発表された「蔓草」も好評で、津世子は「妾もの」でまず矢田文学を樹立した。『神楽坂』収録作はすべて「妾もの」だが、『巢燕』その他にもこの素材がバリエーション豊かに織り込まれている。荒木巍の、近来にない感動作という評に見られる好評を得た「父」（35・11）について、武田麟太郎は女の目からの描写を欠点と批判しているが、「妾」になる女、「妾」をもつ男を女の目から描いているからこそ男性には描けない世界が描かれているので、武田の批判は当たらない。津世子が観察できた世界は「妾」だった。十五歳年長の姉ツヤの婚家・武藤家の当主

三治は妻没後、息子の妻より若い「妾」を家に入れ、彼の長女の夫は妻没後、妻生前から関係のあったお手伝いさんを妻にしている。姉の夫も父の重圧に抗しきれずその抑圧から妾宅を構えてそこに子が生まれている。夫の放蕩に苦悩した姉は後に夫の「妾」やその子の世話を引き受けるようになっていく。叔母は妾宅から戻ろうとしない夫の代わりに一家の柱にならなければならなくなり、そのために次第に気強さ、意地悪さ、疑い深さを身につけるようになってしまっている。妻と「妾」、両者の女の哀憂を心理小説的にきめ細かく津世子は描く。「やどかり」(36・7『改造』)は武田麟太郎を、「改造の小説はりっぱでした。あれは古典として残る作品です。どこか永井荷風の匂いがあり、それが完成さを見せています。(略)」と絶賛させている。確かにこれは「妾もの」に新境地をひらいた作品である。

先見の明に富んだ先代が一代で巨万の富を築いた商売の二代目の尾澤は豪遊、放蕩で家業を没落させてしまい、病身の妻を実家へ置き去りにして「妾」お蔭にやらせている小料理屋に住みついている。店の繁盛で主人格になったお蔭に尾澤は「ちよつとお爛の番をして、下さいな」とか「ほんたうに床の間のお飾りだよ。役立たずだねえ」と言われても、肩身狭げに従うようになっていて、お蔭が店の客の一人と深い仲になっているらしいことを知っても咎め立てできない。

津世子は経済力が人間関係を規定、左右する構図を、「旦那」とその旦那にさんざん貢がせた「妾」とを逆転させるという巧みさで描出している。理性、知性、倫理、道徳に欲が優先する庶民の一面として描きながら、男に隷属しなければならないのは女に経済力がないからだという女の自立問題を提起してもいる。「落合日記」(36・8)には、男の経済力に寄生している女の姿をこれまで書いてきたが、権力となる経済力を女が握った場合をこの作品で書いてみたと書かれている。経済力によって男の上位に立つ女は「秋裕」にも描かれている。

津世子は泉を持った。刻苦の錬磨に励みながらも自在の矢田文学を掘り当てたのだ。すでに時代は暗さを増幅させていた。『人民文庫』が終刊に追い込まれ国家総動員法が公布された一九三八年ともなると、尾崎紅葉研究会までが警官に踏み込まれて一網打尽され雑沓の新宿を数珠つなぎで淀橋署に連行され、写真入りで新聞に載るような検挙の日常化された時代になっていた。書きたいものが書けず原稿料では食べていけない作家が続出していった。三十九年に死んだ平林彪吾の死は売血が起因だったと囁かれたという。ファシズムの圧力が強まるにつれて、戦時国策を指し、また迎合した作品が生まれ始めていて、その動向は急速に加速されていった。検挙、拘留で健康を損ない些か注意深くはなっていたと思われるが、津世子は時局にはまらず自己の文学の掘り下げにひたすら努め、臥床の人になるまで矢田文学は豊饒の時を持続している。この間に書かれた佳品は数多いが中でも絶品は「茶粥の記」(41・2『改造』)である。

「茶粥の記」は「妾もの」から抜け出して新たな鉅脈を掘り当てた名作である。語り手は清子だが主人公は、風呂に入っても消えない墨汁が染みついたこのできている指を持つ区役所の戸籍係を十年一日に続けてきた夫である。清子の唯一の望みのミシンも買えぬ余裕のない生活で彼

は妻の作る茶粥を好み、弁当の菜はいつも当時は庶民の弁当の定番だった安価な塩鮭だった。そのような彼が喝采を浴びるのは、職場の同僚とくつろぐ昼食時にする「うまい食べ物、名物」についての微に入り細を穿つてする話の内容と話し方の絶妙さに対してであった。彼は有名な店の料理も地方の名物も口にしたことなどただの一度もないのだ。通勤途中の窓外に新緑を目にすると嘗て読んだことのある木の芽料理のあれこれを脳裡に作り上げ早速昼休みに弁じたて、同僚たちを唸らせる。牡蠣の季節になれば鳥取の夏牡蠣、鮑なら沼津産のものは甲府で、だが輪島産の方がいい、普茶料理なら……などと料理法まで微細に語り、みんなは思わず唾を呑む。その夫がちょっとした風邪から肺炎になりあつという間に死んでしまう。四十一だった。忌明け後、姑を伴って郷里の秋田に引き上げる矢先、夫が生前に寄稿した雑誌が届く。そこには「白魚のをどり食ひ」「鯛の生作り」「鯉の糸作り」「鰹のたたき」などの美食談が麗々しく載っていた。その語りぶりは読者の味覚をも刺激してやまない。いとも巧みな表現を「白魚のをどり食ひ」を例に紹介してみると、「今でも忘れられないのは初夏の広島島の『白魚のをどり食ひ』だ。朱塗り器、(略)赤い器に白魚！ 実に美しい対照だ。遊いでゐるやつをヒヨイと摘むんだが、もちろん箸でだ。なかなか、こいつが掴めない。用意してある柚子の搾り醤油に箸の先のピチピチするやつをちよいとくぐらして食ふんだが、その旨いことつたらお話にならない。酢味噌で食つても結構だ。人によつてはポチツと黒いあの目玉のところが泥臭くて叶はんといふが、あの泥臭い味が乙なのだ。あの味を解さんで『白魚のをどり食ひ』とは不粹も甚だしい。」という具合である。「嘘ばつかり、嘘ばつかり」食べたこともなくせにと清子は呆れながらもつばがでてくる……夫への思いが溢れでる。人生の哀感をしつとりと包みこんだ作品である。

矢田文学における表現は魅力的だ。何気ない筆づかいだがその一句を紡ぎ出すため辛酸の汗が飛び散っていることが感じられる。「やどかり」の尾澤さんには妻との間に長太郎という一子があるがお蔭に小遣いを強請りにくるような「不肖の子」なのだ。なんとか真つ当な人間にと尾澤さんは意見をしたりもするが、その仕方が歯痒く、「もとく／＼尾澤さんの意見なるものが、仔蟹を真つすぐに歩け、と叱る親蟹のやうなもので、自分から横歩きをさせてゐるのだから世話がない、とお蔭は可笑しがつた。」とあつて笑わせるが、尾澤さんの「横歩き」には妻を置き去りにさせてさんざん絞り取った「妾」の彼女自身が存在していることが棚上げされておかしさが倍加される。巧まずのペースを伴ったユーモアには息をのむところが多い。「魚歌」(40・3)の主人公種子が療養所に兄を見舞った帰途の一添景に見られる、農家の「どの家にも薩摩芋の薄切りが筵いっぱい乾してあつた。かうした乾芋からガソリンをとるとか聞いたけれど、そこまで追ひ詰め振り絞つて行く人間の智慧の働きが、種子には変に恐ろしく哀しかった。」は、さりげなくなされた戦争時局批判で、時代が時代だけにどきとさせられるが、車中で、小男だが活動家で「ダットサン」と渾名されていた兄が勤務先で同僚だった進藤に声をかけられる場面がある。進藤に出会って思い起した種子の連想がおもしろい。「小男といへば種子の田舎にも『源ちや』といふ小男の百姓がゐた。竝んで歩くと、その男の頭のとつぺんのフケまで見える。或る時俄

か雨で、周章てたお内儀さんが縁側にゐた子供を背負ひ上げて畑へ茄子をもぎに行くと、背中から『おつ母あ、それア種茄子だよ』と声がした。よく見たら亭主だつたといふ話である。往来で馬喰と喧嘩して『立つて物言へ!』と怒鳴りつけられたのも、この小男である。塩鮭^{ひき}をかつぐと曳きずつて歩くといふので有名だつた。」など棒腹してしまふが、差別視は微塵もないので不快感にとらわれることはない。

なお、「痴女抄録」「鴻ノ巣女房」「萬年青」その他採り上げたい作品は数多いが詳述する紙幅は残されていない。

ところで、津世子宛て大谷藤子の書簡（『矢田津世子宛書簡』朝日書林'96・1）には痛ましいほどの津世子の文学修行ぶりがみられる。その二、三を挙げてみると「正木さんあなたの御作第一等と褒めてゐます 他に見るべきものなし、と」（38・11・1）は「秋裕」についてだろうが、同時期の「ひかげかづら」にも言えるだろう。戦局の深まりの加速化の表象は、すでに一九三一年頃から戦争指嚆者に変節していた与謝野晶子は特別としても、平塚らいてうまでが、三六年頃から、不健全素質者に優生手術、健全者の産児制限不可という「国民優生法」や皇国史観に立つた皇室礼賛など国策容認、推進の文章を高らかに発表しはじめているが、津世子にそのような時局迎合作はない。ただ、ひたすら、掘り当てた自分の泉を流すことに拘束留置によって損なつた健康の不調をも顧みず格闘している。『茶粥の記』や『鴻ノ巣女房』は、藤子が、あなたは自分の身体を「いぢめる傾きがある」、「いぢめてゐるうちに弱つ」ていつてゐる（42・6・24）、「今のあなたは健康な人よりも御無理をなすつてゐらつしやる」（42・7・4）と危惧したその時節に重なる。

『女人芸術』から巢立つた津世子にしてみればその後身の『輝ク』への参加を拒否することはできなかっただろう。『輝ク』が「婦人の立場より時局認識を深め、国策に添ひたる婦人向上及国家奉仕の実現に努力」を目的とした「輝ク部隊」を結成したとき、宮本百合子たちと共に役員に名を連ねているが、戦争謳歌の発言をここに見ることは出来ない。「花火」（36・9）は二人の子を残して死んだ兄の妻を、好きな女性がいたのに周囲の圧力によって妻にしなければならなくなる陋習の理不尽さが嫂だつた妻も自分も叔父を父とする子も結婚するはずだつた女性をも辛くさせる、ここでは敢えて戦死とはしていないが、当時の戦死者遺家族の悲劇の一樣態を批判的に描いたもので、「千人針」（37・8）は貧しげな老女がよるめきながら一針を頼んでいる光景を慈しみ深く描き、戦地に赴いた人たちを「死なせたくない」、「早く戦争が納まりますように」と念じ続けたと結ばれた小品である。『輝ク部隊』（陸軍恤兵部発行）『海の銃後 第一輯 輝ク部隊慰問文集』（海軍軍事普及部指導 海軍省恤兵係監修 両書とも40・1・1）には両書別作品の戦争謳歌作を載せた作家が多い中で津世子は重複掲載の戦争臭皆無の「俊太郎」を載せている。父の死後、親戚の者たちは俊太郎に働かせて「田舎役人」だつた父の扶助料で細々と暮らすことを主張したが、母はこれをきっぱりと拒否して銀行の事務員取締に就職して俊太郎に大学を出させる。白髪が目立つ年になって母はまだ働いている。俊太郎が蜜豆屋の玉ちゃんと結婚したいと打ち明けたのに対して初めは動揺を見せた母が玉ちゃんの人柄を知って賛成する。家柄とか釣り合いとかを問題にする親戚の思惑を無視した母

を有りがたく思う息子の、母に白髪染めを買うという優しさで結ばれた作品である。軍の指導、監修による前線兵士への慰問文集に他とは趣の異なるこのような作品を載せるのは意志的勇氣が必要だったのではないかと思われる。

時流に流されず、自分の文学に励んだ矢田文学について考える上での手がかりとなる片言を随想やノートから抜き出しておこう。

*男には「老獺な狐」「野蛮な熊」の他、鷲・羊・猫・リス・野守の類がいる。(30・8)

*「どうして、ガモコ(男の子)はガモコで、ヂャベコ(女の子)はヂャベコで遊ばなければならないのだらう。」(ガモコに拒絶されても)「私はしつこく立つてゐる。」(33・1)

*「哀感といふものは、よき物語りの欠くべからざる条件だ、」(38・1)

*「結婚といふものは、女にとつては終点であり、男にとつては始発点かもしれない」(同)

*大谷藤子からの強い勧めで読んだバルザックの『従兄ポンス』によって観察の態度を教えられ、どこでも開けられる鍵をもらった。(38・8)

*岡本かの子文学は「現実の苦悩混迷は、おもてには剥き出されてゐない。紗をとほして、美しい和をみせる」「個性の高さ良さが、素直に自然に、にじみ出た感じ」が特色(39・2)

*葉紹鈞の「稲草人」^か「古代英雄の石像」は、「不正なるものへの反撥、傲慢不遜なるものへの諷刺をあらはしながら、虐げられるもの貧しきものへ暖かい愛情の手をさしのべてゐる。詩情溢るる行間の、鋭い社会批判の眼を光らせてゐるといつた作品である。アレゴリイとしての『稲草人』は、私の心に沁みる作品だつた。」(40・6)(以上、随想から)

(以下はノートから)

*小説は、作者の人格の現はれで有る。

*生活の奔流の中に於ては、恋はその上に浮ぶ一枚の葉つばにすぎない。

*彼女にとつて処女は、結婚生活に這入る一ツのチケツトだつた。

*無口であるといふことは、私のもつひとつの無型の武器である。私は、この武器によつて、文壇とよばれる戦場における私のみじめな血まみれを辛じて救うてゐる。(33・12)

*最も平凡なテーマを、最も平凡に書き現はして、よむ人が打たれるのは、それこそ傑れた文学である。

*言葉の技術は、あとでもいい。まづ、基礎の問題。それは「時代」の正しい把握である。「時代性」なき文学は無であるから。(33・3・16)

*最も多くの事を、最も少ない言葉で云ひ表はす技術。チェホフに学べ！

*私は自分の作品に、泪をふくんで書いたものには満足を感じてゐる。(33・4・10)

*我々は、小説の中で、必然性や偶然性を説明してはならぬ。(33・10・30)

これらのことばには矢田文学を読み解く鍵がある。稿を改め、これらの鍵を使って矢田文学の未開の窓を開けてみたい。

以下、矢田文学の特色について簡単に纏めておきたい。特記すべきは女性作家に多い私小説的作品がほとんどなく、心に沁みるように心理の襞が心憎いまでに描出されていることである。真正の小説家だったのだ。その世界はまず「妾もの」によって女の側から男に寄生する妾になる女、妾を持つ男を描いた特有の領域の発明。ここには妻、「妾」それぞれの立場における女の苦悩と、男の無責任さが描かれる。さらに転じて経済力によって男の上位に立つ女性、その生き方。親や姉妹のために意志的に犠牲になる女も含めて、自分を生きぬく女の造型。ファシズムに抗して戦闘的ではなく柔軟に、しかも最後まで時局迎合作を書かなかった気概。ほとんどの作が庶民階層の人々の生活実感に根ざしていること。そのことと関係するが弱者(身体障害者を含めて)を差別せず温かい情愛で描出していること。そして、九人姉兄弟のうち五人までもが早世という死者に囲繞されていることにもよるだろうが深い人間認識が基底にあること、それがもたらす魅力溢れる文章など。

なお触れたい多くの問題を残しながら、この稿を結ぶに当たって、津世子を愛し、矢田文学の達成に力を惜しまなかった、津世子の最大の理解者でもあった大谷藤子の言葉を部分引用して終わりたい。

大谷は書いている。「矢田津世子は、その生涯を書くために生き、そのために結婚生活に入ろうとさえしなかった。作品を書けるという生活を彼女ほど厳しく選び、愛した作家も稀れだといいたいほどである。自分はどういう意味にしろ圧迫する人を持ちたくない、そのために萎縮する性格だから」と語っていて、「聡明さ、深い思慮、それがときとしては臆病にしがちであった」が、「濁り、悪徳を嫌悪してわが身の生活に立ち入らせまい」とする「心の奥底にある宥しのない感情」を持っていて、晩年には「何よりも荒々しい心情を厭うようになり、情熱さえも露骨なものには嫌悪を感じるようになってきた。余音のある感情生活を愛した。優しいけれど、人にも自分にも嘘を許さなかった」(現代文学代表作全集「第四巻、万里閣、矢田津世子『茶粥の記』解説」。

矢田津世子文学の奥は深い。

(二〇〇二年九月二十日)

記 本稿執筆に際して神楽坂界隈の資料その他をいただいた寺田弘氏、津世子および五城目町をご案内いただいた五城目町文化財保護審議会副会長小野一二氏に、記して感謝したい。